



通俗排悶錄

九三

見人

卷之八目錄
錦衣獄賈五人傳
鬲參軍傳 崔猛
附舟人 義盜 雲娘
飛瓊 義虎傳 大鳥

3144
9



通俗排悶録卷之八

義俠之部

目錄

錦衣獄賈

五人傳

髯參軍傳

崔猛

附舟人

義盜

雲娘

非因録卷之八

3144
9

飛瓊ひるぎ

義虎傳ぎこでん

大鳥おほとり

合十種

通俗排悶録卷之八

義仗之部ぎたけのぶ

錦衣獄賈きんいごくのこ

六樹園公翁譯

全亭正直校



刑部尚書けいぶじやうしやう 趙公錦ていこうきん 南御史官なんいし 雲南うんなん 地名ちがひ ありたり。

上書じやうしやう 國家の利害りがい を稟りやう ける其旨趣そのあはれ 亟相臣きやくさうしん の嚴分宜えんぶんぎ が意い 入

忤こ ひたる因よ 速すみ として京きやう 上のう 万里まんり の道みち を足あ ぬ械を 掛か けらるる行ゆ

ける途中ちゆうちゆう 中ちゆう 西次さいじ 車くるま 入り墜おち たる所ところ が偶ふと 坎か 宙ちゆう ぬへと車くるま 其上そのうへ を通とほ

共死きし せざるる成得なりえ ざる。あはらも分宜ぶんぎ が内意うちい を受う け。警護けいご の者もの の志こころ 已

ざりしをわらん日ひ を歴か べ。都みやこ 著つ たる。錦衣獄きんいご ぬぞ下くだ さまさる所ところ。時とき ぬ

太賈たいが 甘末かんまつ と云い 者もの あり。此こゝ も久ひさ く此獄こゝご の繫つ ねれたる所ところ が趙公ていこう の罪つみ あり。難なん ぬ

遇とて視くと位と云ふ處へ公近日定と拷問せし玉あべ。宜く今よ
 二両足を全うするの計を為し玉六十金を使ひ兩足全き事を得玉
 ちん然とむんを恐るる。兩足共み攻具ぬそるの玉の公の曰。吾
 首領を保つる能ざるんとき。何ぞ足を全く所及をんやと答へり。
 叔明日刑らるる至と其足を夾せんと其傍に青衣數枚在る處が。
 陰に趙公をかむの痛まざるやふ計ひたり。趙公を遂に官人の藉を
 削りて故郷へ歸せり。彼大賈某公の爲に自六十金を出し賄
 公を救ひたるとん

五人傳

天啓の年号
 明の熹宗帝 年間朝廷の宦官の魏忠賢と云者虐威を振ひたり。

諸卿大夫忠直す。刑戮を被る者其數を知ると是故に諸人の怨
 と憤り。周里の徹し。匹夫匹婦に至るや。其事を聞毎に髪を堅心を傷
 しめる者あり。公然とて憤を發し。蘇列名の民が身を
 も顧みず。中貴を抗し。緹騎を歐し。義を立つ。處が如き。外に又無るも
 けり。公は周順昌と云人。初吏部。文官の初。官の官。時人
 望わたり。程を告ぐ。諷告と。蘇列の歸り。老を養ひたる時。公
 朝廷の政事。切齒民に不便なる。號令の下る時。當り。人の口を言
 と民を救ひ。蘇列の人皆周公を徳とて。尊びたる。時。公都諫官
 魏大中と云人。又魏中賢。中ら。建を。流刑に處し。過る所の刑
 過人も敢て通問する者あり。然るに周公を魏大中。此處を過るとして。

一入吳門地（呉門）各（各）往（往）候（候）以（以）手（手）取（取）之（之）慟（慟）哭（哭）。魏忠賢（魏忠賢）を罵（罵）之（之）口（口）を止（止）之（之）遂（遂）
 小為（小）小誓（小誓）姻（姻）縁（縁）組（組）を（を）の約（約）を成（成）。炙酒（炙酒）を奏（奏）之（之）日（日）を累（累）之（之）後（後）方（方）々（々）別（別）是（是）
 去（去）之（之）所（所）。逆璫（逆璫）中（中）之（之）璫（璫）を（を）怒（怒）之（之）璫（璫）が私（私）さる（さる）所（所）の御史（御史）相（相）魏文煥（魏文煥）
 と云者（と云者）小託（小託）之（之）周吏部（周吏部）順（順）奸人（奸人）小黨（小黨）とと劾奏（劾奏）之（之）。朝廷（朝廷）小懸（小懸）之（之）所（所）
 の周公（の周公）の藉（藉）を削（削）之（之）。是（是）小依（小依）之（之）人（人）々（々）已（已）小目（小目）燭（燭）之（之）所（所）。天啓（天啓）六年（六年）織造（織造）中（中）
 使（使）李寔（李寔）と云者（と云者）忠賢（忠賢）小詰（小詰）之（之）所（所）。吏部（吏部）講學（講學）之（之）徒（徒）を聚（聚）と云を
 坐（坐）之（之）。講學（講學）之（之）人（人）々（々）都御史（都御史）付（付）高攀龍（高攀龍）御史（御史）付（付）周宗建（周宗建）論
 德繆（德繆）日期（日期）御史（御史）相（相）黃尊素（黃尊素）李應昇（李應昇）と云者（と云者）と六人（と六人）同時（同時）小（小）上（上）之（之）所（所）
 之（之）小逢（小逢）不（不）詔（詔）使（使）獲（獲）列（列）小至（小至）之（之）所（所）。周公（周公）を敢（敢）之（之）駭（駭）之（之）。唯（唯）懷（懷）慨（慨）之（之）
 功（功）を立（立）之（之）誠（誠）忠（忠）を（を）自（自）諾（諾）之（之）所（所）。居（居）之（之）所（所）。獲（獲）列（列）之（之）人民（人民）を貴（貴）賤（賤）長（長）幼（幼）之（之）所（所）。皆（皆）憤（憤）之（之）

街（街）之（之）所（所）。其中（其中）小顏佩章（顏佩章）馬傑（馬傑）沈揚（沈揚）楊念如（楊念如）周文元（周文元）と云五人（と云五人）の者（の者）最（最）列（列）之（之）
 之（之）所（所）。顏佩章（顏佩章）之（之）賈（賈）人（人）の子（子）也（也）。家（家）小千金（千金）を貯（貯）之（之）者（の者）有（有）之（之）少（少）き時（時）々（々）
 父兄（父兄）又（又）從（從）之（之）賈（賈）之（之）事（事）を欲（欲）せむ。獨（獨）二（二）俠（俠）を成（成）之（之）。埋（埋）中（中）小游行（游行）之（之）所（所）。周（周）吏部（吏部）
 部（部）建（建）之（之）時（時）。郡人（郡人）皆（皆）震（震）駭（駭）之（之）。肆（肆）を罷（罷）之（之）。其上（其上）小詔（詔）使（使）之（之）所（所）。張（張）心龍（張心龍）文之炳（文之炳）と云兩人（と云兩人）の者（の者）民（民）を虐（虐）之（之）。暴（暴）恣（恣）之（之）為（為）之（之）。民人（民人）益（益）々（々）怒（怒）之（之）。前（前）後（後）身家（身家）を顧（顧）之（之）。敢（敢）之（之）先事（先事）を奏（奏）之（之）者（の者）有（有）之（之）。是（是）小於（於）之（之）顏佩章（顏佩章）香（香）
 之（之）熱（熱）之（之）市（市）中（中）と泣（泣）行（行）之（之）。又（又）城（城）を周（周）之（之）呼（呼）之（之）曰（曰）。吏部（吏部）が為（為）小屈（屈）を訴（訴）之（之）所（所）。者（者）有（有）之（之）。市中（市中）或（或）之（之）議（議）。或（或）ハ詢（詢）之（之）。或（或）ハ泣（泣）之（之）。或（或）ハ切（切）之（之）。或（或）ハ罵（罵）之（之）。或（或）ハ頼（頼）之（之）。或（或）ハ天（天）を顛（顛）之（之）。或（或）ハ苦（苦）を告（告）之（之）。又（又）ハト（ト）坐（坐）之（之）。或（或）ハ金（金）を集（集）之（之）。或（或）ハ嘯（嘯）之（之）。或（或）ハ類（類）装（装）之（之）。或（或）ハ京師（京師）に去（去）之（之）。或（或）ハ登（登）之（之）。或（或）ハ鼓（鼓）を（を）者（者）此（此）鼓（鼓）を

打く。搦んとする者あり。奔走して巷衢に塞す。道路に満るる。凡四日
 奔之。搦んとする者あり。奔走して巷衢に塞す。道路に満るる。凡四日
 初若使至と詔を宣る時諸生王節楊廷樞文震亨徐汧表
 徴と云五人の者竊ひ計て曰人を怒る事甚し。吾徒早く西臺に掲くと
 衆人の怒を擇べしと。又換列の父老の謂く曰。激し過する勿き。激し過
 するは。吏部の禍を重く。却て吏部の為に成らざると諭しけり。父老皆
 諾し之。叔五人の者相共ひ西署に詣り。巡撫都御史。一覽と云人
 請く。周吏部が罪を謝せんと。此も一覽の瑞賢が私人。是目吏部が凶服を
 着て。吳縣の令陳文瑞と云者と。同く縣村役をも西署に至り。顔佩
 章と衆人を率て後より隨ひ行く。馬傑此時先擊つ。拊して市中を呼
 びけり。従ふ者忽萬人に及びけり。折ゆ。兩降陰慘く晝と夕とを晦る。

けり。吏部を送る人皆香を拈事。炬を列べたる如くゆき道を照せり。然して
 衣裝冠帽を皆兩小淋瀝く履履相躡く泥凍成り。脛胫之没す所
 履る。吏部を肩輿に昇れり。行を衆人皆競ひ争り。吊けし。道塞くと
 前を行く。或る。吏部を諸父老に向て。勞苦のあはし。けり。顔佩章
 等も是をゆき。悲み堪はず。天を仰り。大に哭き。其聲數里の外にても
 ゆる。時を移し。西署に至り。西署に帷幕儀仗を設け。嚴重
 小飾ひ成し。詔使張應龍を。諸緹騎と共に庭上。小氣張くと立。最下。小銀鐙
 鈕鐙等の諸具を陳べけり。衆人目を屬くと皆哽因して。列居る。時。諸
 生王節等前へ出。毛一覽及び巡撫御史。目付。徐吉。白く。周公。一旦
 璫が首。小忤を以て。逮ふ。就一。故百姓怨む。痛ん。控告る。不斫る。明公。

人ホをさうとて天子の重臣とくく蓋ぞ是を請く其罪を釋く民の心成
 明公あぢきまぬと天子の重臣とくく蓋ぞ是を請く其罪を釋く民の心成
 慰ト玉ハざる一覽日吾も斯も斯も聖怒の甚を奈何せん諸生又曰然ぞ
 今日のるハ是ハ東廠魏公の矯治る也且吏部元來辜る徒ハ口舌を以
 禍を賈ふる明公切ハ上陳一玉ハ幸ゆと清る我ハ得ホとも道を直す天
 日わくハ即明公ハ不朽の年あらん若又清る我ハ得ホとも道を直す天
 壤の公ハ背き玉ハせん明公ハ於ても獲所亦多るべいと云け一覽を
 始め張應龍文之炳も一言も對る事無く只黙然とく居け且諸緹騎
 目を相視く耳語ける此輩と何者ぞモ公驚何ぞ早く法を以て繩一
 玉ハざると云合へ揚念如沈揚西人共ハ臂を攘げく直ハ前く詎ハ且注
 日必我請所の如く一玉ハざるん若清夏を得んを吾倚此所を去ト

と云く此揚念如と云人も故閭門の粥衣入るも沈揚とくと牙儂
 此兩人共ハ吏部と未相識るも顏佩章共交りたる者共
 義ハ感とくすも兩人久く蒲伏く在け且磨く死と云け且
 肯く犯さず緹騎怒く是を吐け且忽衆人の中より大声ハ忠
 賢逆賊忠賢逆賊と罵る者あり諸人驚く是を以て則馬傑る緹
 騎大ハ驚死吐く日鼠の輩何ぞ斯大言をるる速ハ兩ハ頭を断んと云
 傍ハ有る銀鑰を取て擲け且階ハ中より若然と音せり又呼て曰
 囚共ハ安ハ在る速ハ檻車ハ載く東廠の魏公ハ送るべいと云け且
 ける顏佩章進く問く日上意を朝廷より出せ且願く東廠より出る
 うと云時ハ衆人大ハ譁立吏部の輿人周文元と吏部の速るくと云け且



横州五人乃
 任侠
 自ら証寛の
 罪も伏す

晝夜晞立し食を絶く。一飲も咽み下らざ。三日之夜歎き悲み。其が
 顔佩章が言をゆも敢ず。躍り出く直に進んで吏部が械と奪取す。
 是を以て緹騎の石や丈元が額を撃て傷つけり。丈元大に怒り打て懸
 まる。衆人も亦俱に憤りて一同に躁ぎま。文之炳は怒り懸る。之炳大
 に懼りて逃びま。衆人群擁りて堂上を驅上りて。擲楯を皆折損す。
 履履を脱ぎ堂上を擲著る。寔は矢石の落るが如く。堂上堂下上を
 下へと雜擾ける。皆緹騎共々京師を去りて。久く驕横し至る所の
 郡縣輻輳せざる。然るども皆其威を恐る。唯々と云く命のす
 べ奔走し。何處も斯の如く。以てひるる。漢民の激怒寔に不意
 ぬけし。大に殄死皆踉蹌と。逃る。其中入の緹騎。署閣の桶を登

くと匿し。桶動たけし。驚て墮る所を念如る。早く格殺す。
 一人を垣を踰り。渾中を走りて。逐著る。履を蹴上げ。腦裂く。
 斃る。或は厠の中を匿し。或は荆棘ゆく身を隠し。居るを俱に
 捜し出く。殺す。一路。徐吉を皆走りて。幸き命を助ける。
 王即等五人の者も。事の敗れを承え。前んで踰り止んと欲し。けども。
 衆の勢ひ盛りて。踰り得べからず。皆父老の中。事練る者共々。中
 と後悔し。追々散り去り。是日。御史黄尊素を逮り。緹騎の
 舟に乗りて。昏江と云處に至り。舟を次ぐ陸の上。郷中を乱妨し。市
 中の人を執り。辜を成。捷けし。郷中の人城中ゆく。緹騎を毆殺すと
 せし。又同じ緹騎を毆殺し。其舟を焚き。尸を水中に擠る。次日。兩霰

けし。卿大夫素股し。西臺の地方を数むる所以を策ら
 せらる。玄程小毛一鷺を密書を作す。夜中の騎を飛せし東廠の白し。
 且疏を草し。愛有る由を天子に奏しける。因て檄を飛し。蘇列は
 下し。曰。柝を撃て衆を聚し。者を誰ぞ香を熱し。市中を踞し。行
 し。誰ぞ。驍雄し。勇を賈ひ。魁し。獄囚の黨し。天使を成る。誰
 誰ぞ。必悉く。誅し。赦むる無れ。と云。世々。衆人始の程。皆周吏
 部の故を以。義氣相感。発し。故五人の者。多び呼ぶ。千百人。群て聚
 る。今捕へ。誅せし。んとすと。す。と。稍々。と。懼し。と。逃散る。時。五人の者
 出。自謂。曰。我々。を。顔佩韋。馬傑。沈揚。楊念如。周文元。あり。と。各自名
 のり。俱。不。繫。不。就。係。五人の者。齊く。云。吾。侪。小人。也。吏部。不。從。

死せば。死せざる。如し。と云。周吏部。詔獄。死し。及て。五人
 の者。亦。呉の市。斬。五。人。共。談。笑。自。若。少。も。懼。る。色
 ら。勇。く。斬。ら。れ。其。刑。不。就。一。日。前。暴。風。大。雨。大。湖。の。水
 大。溢。し。又。廣。陵。地。の。人。の。話。を。彼。小。鬼。文。煥。家。に。居。る。白。晝。堂
 上。に。坐。し。忽。々。五。人。の。者。嚴。く。装。束。し。劍。を。仗。旌。を。建。て。周。吏。部
 不。後。と。來。る。と。見。え。一。が。忽。々。不。見。す。庭。の。井。石。刺。自。然。不。飛。記。す。空。中。に
 舞。る。の。良。久。く。隨。之。其。声。雷。霆。の。轟。如。く。明。年。烈。皇
 帝。即。位。し。至。ひ。魏。忠。賢。積。惡。發。覺。し。誅。せ。る。吏。部。の。子。周。茂。蘭。
 血。を。刺。し。書。を。上。る。父。の。寃。状。を。奏。し。け。し。詔。し。吏。部。が。寃。を。恤。み。似
 召。す。鬼。文。煥。を。誅。し。於。は。蘇。列。の。士。大。夫。相。殘。し。即。ち。前。に

排解録卷之八

七

夷を所の増おほ賢かみの廢址あて五人の身首みづかみを寢あめり合あ墓むらと石いしを堅たまへ表あと。四時よじの祭まつりを成なし縁ゆかり今いま必かならず至いたるまじく換か列れつ五人ごにんの墓むらと稱なづけし香かう華けの絶たる更さらる。証あかし寛かんせし色いろ一ひと人ひと指さす祈いのる必かならず其その驗あかし應ありしとん

髯參軍傳

明あきの思おも宗そう皇こう帝ていの時とき。公子こうし某なにかと云い入いりわむ。時ときの相あ國くに大臣だいじん某なにかと云い入いり。奔は走そうし。京きやう師しと云いる三さん千せん兩りやうの金かねを持もち。獨ひとり故こ郷きやうの歸かへりて途みち中なか一人ひとりの僧そうの遇あひる。此こゝ僧そう容よう貌ぼう猙きやう獍げいし。行ゆ李り鐵てつの扁へん拐くわい黒くろく光ひかりと甚と重おもきを肩かたと。公こう子しをつりかへりる凡およ二に泊とる。公こう子し初は初はより意い必かならずみず。是こゝ夜よも旅り舎しやの抵ひり左ひだりの廂さやう止とまる。彼か僧そうも繼つぎとつり右みぎの廂さやう就つて炕こゝろ上うへの側かた臥ふし。け。旅り舎しや主人しゆじん密ひそに公こう子しを呼よび耳みみ語ごける。客きやく必かならず京きやう師しと云いる才さい也なりとある也なり。

攘あ中ちゆう必かならず金かね有ある。こまに彼か僧そう俱とも来きり止と宿しゆくせしる。若わ金かね無なんを彼か突つきぞ。客きやくと俱とも至いたる。やと知しせし。公こう子し始はり心こゝろ動うる。倉くら皇こうと措そを失うひ居ゐる。時とき忽たち一人ひとりの大だい僕ぼく子し来きり。是こゝをつり公こう子しの長なが八はち尺せき餘あまり。腰こしの大だい十じゆ圍い。兩りやうの指さしをつりて。鬚ひげ髯ひげ盡つく赤あかく。激げき張ちやう事じ。帽ぼうの如ごとし座ざ上うへの即すなはち弓ゆみを擲なげ刀やいばを投なげ大だい音おんゆ。酒さけ食じきを持もちと呼よぶ。甚と急いそに公こう子し益ますます驚おどろし怖おそれ。股また栗りと。既すに小こ使しと。虬しゆ髯げん微み傾かたむ。曰いふ。君きみの神かみ色いろをつり必かならず急いその事ことある。蓋おほに早はやく玉たまと。向むかひ。公こう子し之これ屏びん息いきし。瘡かさの如ごとく成なり居ゐる。故ゆゑ主人しゆじん乃すなはち公こう子し代しろり。金かねを持もち僧そうの遇あひる。代しろり。迷まよへ。髯ひげ曰いふ。其その僧そう今いま安やすに在ある。主人しゆじん即すなはち右みぎ廂さやうを指さす。炕こゝろ上うへの臥ふしと告つげ。髯ひげ乃すなはち公こう子しを願ねがひ。動うき玉たまと。勿なしと云いふ。直ちやく刀やいばを

提げ廻を排き入りて罵く曰。鈍賊何ぞ道上の糞を拾りて。却て行
 劫を為すやと云ふ。彼鐵の扁拐を弄く。屈く。環を成し。杭
 止し擲く曰。若是を元の如く直さ。若し心聽客の金を取去。若直せ
 る能へんば。亟項を引く刃を就れと云け。僧僵臥し動さ。良久して
 始く匍匐し地を下り。命を助け玉へと請ふ。扁拐の環を成し。視て
 又大膽を冷し。泣を下し。益哀清け。髯咲く曰。我料る。若此扁
 拐を直さ。能く。吾若く為。是を直す。是看る。若く。直し
 僧の擲く。若速く去。乃公の刃を汚さ。勿と訶す。僧は鼠の如
 く如く。頭を抱へ。道行々。公子と主人と。門外より。乞と觀る。舌を吐り
 の多。趨て前。羅拜し。姓名を問け。髯笑く。答へ。皆安心して。寢ぬ。

次の日早天の起出。公子の為。道を護し。行んと云け。公子大喜。拜
 謝し。同行。日を短く。揚列。國の界。到す。髯公子。向く曰。
 君但獨行玉。是より先。患わす。吾。去んと云。公子頭を叩
 く。拜謝し。曰。某客の大恩を受。報い奉る。無し。願く。三百金を進
 せ。壽を為ん。且。某が家。抵る。計る。僅四日の行程。願
 くと。俱。江を渡。南。某が家。至。と云。髯笑く曰。吾家を
 紀。軍。從。今。隻身。行。幕府の標官。屬。設。金を。奉。ら。ん。其。時。幸。我。が。麵。十五斤。生。蔬。二口。酒。一石。を。具。玉。と。云。ん。ば。

公子已むる疾る疾る。涙を流しと別る也。斯く公子家又歸り。數月を過しける處。忽ち門外より大音揚る。公子恙無しやと呼る声。けはる公子驚き。是を聞る。髯果して至る。大悦び。出迎へ。寒暄訪畢て。舊事の大恩を謝し。多ふ。髯耳ゆも聞入る。唯大み呼る。吾飢る。夏甚し。急め約せる品を具へ。夏と云け。公予丞。麵。生。酒を約の如く進めける。髯立所。酒を飲み盡し。腰の佩たる刀を拔く。生。を刺し殺し。公予曰。參軍の。み揉く餅とる。炙る。吹ひく。忽其半を吹ひ盡し。公予曰。參軍の。力寔の山と拔べ。度る。幾百鈞を卷玉ふ。と問け。髯答く。吾も亦自。幾百鈞を拳ると云。夏を料む。今是を試んとく。乃庭の楹の上。站く。數十人を集め。身と撞し。むる。立る。少も動る。髯曰。是吾が力。代

試す。不足ら。又二指を繋ぎ。中を一寸程。開き。繩を二匝。繞ら。健兒數人を差。と力を極く。両頭へ曳し。むる。屈強ある。鐵の如く。一分も動さ。能は。を。公予進く。曰。今天下。盜賊。蜂起。朝廷。兵を用ひ。玉ふ。吾料る。參軍の。威武を以て。賊を。中原。殺し。王へん。朽木を。拉ぐ。如く。今首相。某と。吾師。吾一紙の書を。馳せ。參軍の。夏を。稱せ。大將軍の。印を。掛玉へん。且夕の。間。吾人の。磨下。と。隷と。成る。居玉へん。やと。云け。髯。天を。仰り。呵々と。笑ひ。徐に。公予。向く。曰。君を。固く。某相。困。の。門下。の。士。吾行んと。云く。願ふ。せ。出。行。名。と。名。

崔猛

建昌地名小崔猛字之勿猛と云人あり。建昌ありと世家の者あり。性剛
 毅めく幼き時。師の塾中不在。同門の諸童蒙。稍一犯あるを崔輒
 拳を奮と毆撃せらる。師屢戒まを遂に悔むる。因て名字を師
 の斯と付たり。是猛き性と云へど心不抑へ。必外に出を莫勿と云
 戒の意えたり。已に十五六歳の成けし。強力武術人。絶倫也。又能長干
 と持く。夏屋小躍して登るるの妙を得り。平日喜く人の不平を雪ぎ
 る故郷人盡く服し敬ひ畏る。是故より父の上の難儀を歎き拵へ
 頼る事ある者益夜絶む家に入り居り。崔洋小を笑く。強と抑弱
 と扶けく。人の怨を悪むをも避む。或大に怒まば毎人皆懼る。敢て勸
 る者有。惟母の事と孝行する故母至ま不怒怒を解む。母譴責するの

備至るまも。崔毎に唯々と云く命は背くるの事。其頃比鄰小悍
 婦あり日々小其姑を虐しく辱めく。餓死せんとす。其子竊て食
 と與へて啖しけし。婦知覺て夫を詈罵し止す。其声四院に傳え
 ける。崔其声を聞き堪へむ。垣を踰り入り悍婦を捕へ。鼻耳唇舌
 盡く割けし。婦立所を驚たり。母乞を乞く大に駭き鄰子を呼ぶ。極
 意小周卹み。少の金を遣り葬を為し。自家使ふ所の少婢を遣り。婚
 せ。免事乃寢る。母之憤泣し。食をも啖べり。崔懼ま。母の前
 小跪死後悔せる由を告ぐ。杖を受んと清けし。母泣く願ふ。崔が妻
 周氏も亦與小並と跪き清々。母乃崔を杖く。又針ゆく。崔が臂小十の
 字を刺す。朱を塗る。滅るるの勿らしむ。崔謹く責を受る。故母稍々小

心解く乃食を啖ひたり又母嘗て僧道不飯する夏を喜む性々
 あまみ厭食飽せしむるのわら。適一道士来る時。崔門際ゆく行遇ふ
 道士崔を目く曰郎君凶横の相あり。恐らく令終を保ち難うん
 積善の家ゆ有ゆるるものと云まが崔母の戒を受へ上るまは
 皮く敬まるを犯し。答く曰某も亦自是を念ふ然も共如何せん但一
 び不平の事とる時と自禁へるが性あり。今より後力めく改ん
 と欲ま免る可や否や道士笑く曰姑く免ましや否やを問る勿先
 く改むや否やと自向王へか。君但痛く自抑へ若萬一の夏あふ
 吾君が為小死と解る術を告んと云崔生平厭禳を信せる故笑て
 答へず。道士又曰我固より君が信せるる我知る。然も今我が云所

のるも巫頌のあまごも服むと云けま。崔願くを乞ふと清ふ道
 士乃曰今門外ある一人の後生君宜く厚く結玉の命。死罪を犯す時
 小至く。此人能君を活えとく。即崔を門外呼ぶ。其人を指示る。其
 人趙氏の兒ゆ名を僧哥と云ふ。趙氏は南昌名地の人とく。侵饑を避く。
 建昌名地又僑寓し居るを崔見る。深く相結み。遂小趙氏を替て吾
 家の館し。厚く供給る。此時僧哥年十二ありけま。堂の登下く崔
 が母を拜し。崔と昆弟の約を為る。年と踰く時。子時成けま。趙氏
 の家内を推へ。古郷へ去りて居る。其後遂不音問を絶し。崔が母を崔
 が隣婦を死せしむ。崔を戒むる夏愈益切し。若人來て赴訴る者
 わま。輒擯斥し。崔の面せす。崔も亦慎守り居る。或日崔母乃

弟卒る由を告末でけは。母は後と共小市小行を途中小く忽熱
 鬧りけは。何復るんと是を見ふ。數人ゆく一人の男子を執示す。
 呵も罵りて推撲さう引行く。觀る者多く。道路塞す。進むを得
 ず。崔何復ぞと向けは。崔を誠認する者競ひ來り。相擁り告る。此
 郷小巨紳子某甲と云者あり。一郷中の豪横しく人を虐せしむ。此
 李申と云者の妻の色を窺り奪へんと欲せむ。由道る死故に家人
 小命し。李申を誘り共の博賭をさせ。賞を貸り其息を産く。其
 其妻を券小署り。輸盡せ復借り。子母積り三十貫餘成る。故
 李申償事能はむ。是に於て強小ヨ人遣り。申が妻を裏ひ取り。李
 申歎え悲く。某甲が門小行り哭泣し。請ひらる。某甲大に怒り。李申を

樹上の藪をたつは。遍く無悔状を立しむと語り。崔
 竹く忽氣涌り。馬の鞭を前んとし。母轎子の中より是を見り。簾を
 寒く大に呼り。曰。昔又故態を發せ。と云ふ。崔乃止り。既小市
 しく歸り。言をも語む。食をも啖む。只元坐し。直視居る。妻是を詰
 め。答へず。夜榻上の臥せむ。終夜輾轉し。煩悶し。寝む。此の如く
 うぬ。次の夜も復同く寝ず。戸を啓り。輒又還り。臥す。此の如く
 更一夜の中は三四びる。妻も敢て詰む。惟心中小憎り。聽ひる。既して
 崔亦出く遅久し。反り。扉を掩り。熟寝す。其某甲が家あり。此夜
 誰共知はず。某甲を床上に投り。腹を刳り。腸を流し。散り。甲が妻
 をも殺し。尸を裸にし。林下に棄置す。翌朝小至り。家人始り見り。

大に驚死速に官に訴へるが官乃鞠訊し。李申が所為を尋ねんと疑ひ
 速に李申を捕治し強く責むる。踝骨皆見り程もども。李申卒
 二言の詞を積年餘りし李申堪るる能はず。遂に腹を切りて
 論らざる折る。崔が母死し。既に殯するに畢まれば崔妻が告ぐ曰
 先之夜某甲を殺す者寔に我なり。老母在を以ての故に徒に日を送りて
 敢て口外せず。今大事已了ぬ奈何ぞ我一身の罪を以て他人に決せんや
 我自有司に赴く。死せんものとて欠けし妻驚と衣を挽く止めんと
 すと。裾を絶て行遂に庭に自首し。官は之を憐れ愕然とせども先械
 と獄に送り。即李申を釋ゆんとし。李申可ず。堅く争て料を刃
 ぬ受んとす。官も決する能はず。乃兩人共刃を置たり。李申が戚族

皆李申を誦讓し。曰何ぞ誣承するやと向けし。李申答く曰
 崔公子の爲る所を寔に吾が爲んと欲しとえ爲るなり。然るに吾坐る
 ぐ其死を視るに忍びんやと云く。かく詞を異す。崔と對決するも
 固く争ふ。然に共衙門中も日を経く。皆其故を知りけし。李申を強
 と獄に送り。崔を罪に抵し。決し就末んとす。折る。郵刑官
 趙部郎と云人建昌地名。案臨し。王囚共を問する。崔猛が名有けし。
 即人を屏げく崔を吸入る。崔入り仰く堂上を視る。僧可て大に驚死
 悲喜し。寔を訴へる。僧哥排徊良久。仍又獄に下し。獄卒
 共み囑し。善く視る。免尋ぐ。崔自首すと云を以て死罪を免し。
 雲南軍地名。軍の成卒を充て遣する。李申自清く腹役と成て共

非目録卷之八

十一

小行々所。未一年あるに。赦免の例をひらき。故郷に歸りて。僧哥が力あるなり。既而歸り。後も李申の終小後と云ふ。是故に崔
 代と生業を經理する。因て賢を予へられども。李申受む。是故に崔
 心用ひて厚く遇す。妻を與へ田を授け給ふ。崔も亦是より力と前
 行を改め。毎の臂上の刺痕を撫と。法然と涙を流し。母の教戒をひ
 出たり。是故に郷鄰の屬するもの。李申輒行くと崔が命と矯と排解
 し。崔のやせざるなり。爰に王監生。と云者あり。家豪富あり。暴
 惡ありけり。四方の無頼者多く其門出入を。邑中の富る者多く
 是を掠め取らるる所。或は王が公に者あり。輒盜を遣て途中にて
 殺さしむ。玉が子も亦淫暴あり。家の一人の寡孀あり。身を憑る所を

故王家の寓居し。父を王父子共小を惡せり。妻の仇氏を知ら
 屢王を沮めけり。王厭ひて遂に妻を殺しぬ。因て仇氏兄弟官小
 鳴と質と精々所小王諸官人小賅し。喞み。法成曲と遂に仇氏兄弟
 と。証告と云罪小坐し。仇氏兄弟冤憤伸る。崔小詰と求訴
 んとする。李申絶て。崔小遇せざり。數日を過し。客至り
 け所が。適僕共一人も在合せ。崔李申を。茶を瀉さんとしてけり。
 李申黙し。外小ゆと人小告て。曰我元來崔猛と主後の契有小非ず。
 實に朋友の尚萬里の外迄も後ひ徒と。艱苦を共の嘗たり。吾崔小
 對し。行届ぬ事あり。然るに少の廩給まらざる。後使を事
 斷養と同くせんと欲す。是甘む所と念く。遂に何處共り出

去す。或人此支を崔小告げし。崔も其即を改し。成訴せしめ
 ども。未甚信せし。所所。李申忽公堂小訟。曰。崔三年の間の備價
 を給さざると云ふ。故崔大に異。親官府小知。對状しける。李申愈
 と崔と相争ふ。然も共元來不直のる。官不直を責む。李申を
 逐去す。其後数日を過し。李申夜王家小忍び入り。王父子嬖婦
 三人共小忍び殺し。自姓名を紙に書し。壁小粘着。踪跡も無く亡命
 し。王家追ひ捕へんと。さる。不知。崔が主使る。んと疑ひ。と
 官小訴へ。是。官ゆる。崔を疑へ。此時崔始と悟す。李申が
 前日の訟。人を殺す罪の己を連累せし。の。為。ある。支を知り。り。
 官ゆる。李申を追捕せし。甚緊急。斯る。小。賊。あり。と。周。圍。を。知。り。て。困。を。知。り。て。

運賊。順列。名を犯し。係。故。其。る。遠。小。寝。る。程。あ。く。明。の。代。品。草。し。と。清
 の。代。と。成。け。し。李。申。家。を。携。へ。帰。り。來。り。復。崔。と。善。き。支。始。の。如。く。し。り。
 時。小。土。寇。の。黨。を。結。び。聚。り。し。王。監。生。々。後。子。小。王。得。仁。と。云。者。あ。り。叔。監。生
 が。招。き。置。し。無。頼。子。共。を。集。め。り。山。小。據。り。巢。を。構。へ。村。疇。を。焚。掠。め。り。盜
 を。為。し。一。夜。巢。を。傾。く。崔。家。小。至。り。復。離。を。以。り。名。と。し。劫。掠。せ。り。適
 崔。と。他。小。出。り。家。小。在。む。李。申。扉。を。破。り。入。り。始。と。覺。り。大。小。驚。き。と。牆。を
 越。え。暗。中。小。隱。伏。し。窺。ひ。し。賊。共。と。崔。を。搜。せ。し。得。ず。故。崔。が。妻。を。推。り。へ
 財。物。を。括。り。奪。り。取。り。去。り。し。李。申。歸。り。見。し。家人。皆。逃。散。り。止。一。僕。の
 と。居。け。し。無。念。小。心。の。と。ま。し。た。為。方。あ。り。乃。繩。を。數。十。段。斷。り。短。た。者。を
 以。て。僕。小。付。し。長。き。者。を。申。自。懷。入。し。僕。小。囁。り。賊。の。巢。を。越。し。と。

山の登り半頃に至りて。繩の火を熱く荆棘の散り掛く。後を顧みずして
 早く帰る来と云へ。僕諾しと出行々。李申賊を窺ひし。皆腰の
 紅き帯を束ね。帽ゆを紅絹を敷いたと云へ。遂に其装の劔又老る。北馬
 の頃日駒を生くる。乃一賊共門外に棄置し置る。李申乃駒を縛し
 をた。北馬の跨りて。牧を。牧の竹ゆ。製し左右に紐を付。後ゆく。掃びく。衝き出
 直に賊に到り。見れば。賊も一大邸の據り居る。李申乃馬を村外
 の執系ぎ垣を踰り。忍び入り。見れば。賊共衆聚紛紜と々。拵戈未釋す
 しく在る。李申竊に諸賊共小問く。崔が妻の所在を知り。如何と
 窺ひ居る。處に俄に令を傳り。各自を休息せしむ。時小轟然と噉應
 しく。忽一人遽しく来り。東山の火有と報けし。賊共皆口を望み初

一二點見えける。忽多く成と星宿の天の列る如く。見えし。時李申
 大息つぎ。急に呼く。陳營の夏丁そわまこと云けし。王得仁大に驚
 き。遽に甲を取。肩の投掛衆を率て。出行々。李申も其肩の衆に
 隊の中を漏れ。後下り。引返しく。内に入り。二人の賊共帳を守り
 居る。頃と給く。王將軍佩刀を遺し。王の。吾の持来とと命し。王のとのひ
 けし。西賊競ぎ内に入り。佩刀を覓んとする。然李申後より。破着けし。其
 入後へ踏む。此音に驚き。一人回顧る。處を又。斬着けし。を
 遂に二人共。声をもたせ。と。墜死せぬ。李申内に入り。崔が妻を有る。ひ
 牆を越。道に出馬。め。うち乗せ。嚮を授。曰。度る。小娘子。徐知。王
 へ。馬の縦せ。行玉。此馬駒を懸。心。駛奔る。と。周氏を獨歸し。

其身も後小従と一隘口を出る所。又烟火を灼く。編く木の枝荆棘は
 掛け帰る所。次日早天の崔還と是を伴う。大辱を見らる。跳躍
 と。單騎往之撃平げんと驅出さる。李申のろく。諫之寢止めを
 李申村人を集めて謀らんとす。衆人咸懼怯一人も敢て應ず。昔
 あ。李申再四辯論し之れバ。けり同公す。者二十餘人を得たり。然れ共
 又兵具乏死小苦し。之を折節得仁が族姓家小於之。奸細二人を獲り来
 とり。崔を殺さんとし。けりも李申可也。二十人の者命と。浴びて
 白杖を持し。一遍の具列後彼奸細の者を引か。二人共其西耳を
 割く。幾ち遣えれを衆怒り。曰此等のありをゆ。方ぬ賊の知ん事を
 恨る。然るに反て放ち脱さ。賊若其巢を傾く来が。盧村必保の度能り

と云け。李申曰吾も正ぬ其来らん事を欲ま。と。彼奸細を匿し
 置し。前者を執へ。之を誅し。人を所々へ。弓矢小筒の類を借あ。り。
 是は往く大筒二。借出。日暮ぬ至る。李申壯士を率。艱險の隘口の
 處ぬ至る。砲を置。其衝ぬ當。二人命と。火を取。隱伏し。賊
 賊来る。速ぬ突。又谷の入口の東の方ぬ行。樹を伐。崖の
 上ぬ置き。自身も崔と共に各十餘人を率。岸を。埋伏し。賊の
 牙。今や。待居。賊將王得仁も。斯備。虞わ。んと。夢ぬ
 知る。一便過る頃ぬ。大衆を率。出来。李申遙ぬ馬の嘶を。使。く
 暗ぬ。賊共果。巢を傾。出。李申賊共の盡く。谷ぬ入
 了を俟。乃崖上の樹を推。歸途。断つ。俄砲。声。山谷ぬ

崔猛義に依て
 李申少為平
 甲夫婦を踏
 殺せ



非問采卷八



非問采卷八

震動しける。賊は成ゆくと遠く悚き。驟に引退んとし。相互に蹂踏し。さうく東口に至りては途塞く。成るは。一處に集りて。少の隙地も無し。兩岸より射發つ矢銃も。兩敵の如く。頭を断し。手足を折者数を知らむ。枕を並べ溝中。小藉満つ。僅に遺る二十餘人の者。頭首膝行し。命を乞へば。乃人を遣し。繫し。送る家。小撃。置き。各を勝。小乗し。直に賊巢。小抵。し。れ。巢を守る者。風を竹。奔。窟。二人も在合。其輜車を搜し。奪ひ。還り。其西の方。追ひ。至らん。夏謀を向け。李申答。曰。火を東。設る。其西の方。追ひ。至らん。夏を恐。其繩を短。せ。其速。燃。盡。ん。成。欲。を。其。速。小。盡。ん。夏を欲。其。人。無。き。成。偵。ひ。知。ん。る。を。恐。ま。く。之。既。し。く。谷。口。小。

設く所。谷口甚隘。一夫爰を守ら。萬人も通る事能は。賊の追来る。其火を。必。惧。んと。謀。之。是。皆。一。時。險。を。犯。す。の。下。策。也。止むる。成。得。ざる。故。之。云。之。成。賊。を。鞠。々。成。果。し。く。追。く。谷。口。入。り。火。を。見。く。大。小。驚。馬。き。俄。に。退。た。成。由。を。云。之。成。是。於。く。二十餘人の賊。共。を。盡。く。削。り。則。く。遠。に。放。ち。し。る。是。由。之。威。声。大。に。遠。近。に。震。ひ。し。く。乱。を。避。る。者。從。ひ。す。る。の。市。小。行。が。如。く。土。圍。之。百。餘。人。を。召。る。各。處。の。強。寇。敢。て。來。り。犯。す。者。あ。く。一。方。是。に。頼。り。安。堵。し。し。成。と。云。

附舟人

嶽列。名。小。布。高。を。為。す。者。あ。り。密。に。平。兩。の。金。を。携。へ。る。成。り。人。の。知。ん。事。を。恐。ま。く。布。の。捆。中。に。分。ち。貯。へ。舟。小。載。せ。し。く。歸。り。し。成。路。ゆ。く。附。舟。を。求。む。成。

人の中、其人を乞ふ所、状貌雄偉あり。既舟の登りて、物語と爲り、甚欵洽
 あり。二宿を裁し、其人別と云ふんと、其時、岸上の囊を擔ひ、煙膏
 者有を招き呼ぶ。是れ其友人あり、由り。其人乃、商と友と成、趣へて云
 へ共、村中の酒店へ行、酒を飲、之を畢、友人と囊を擔ひ、先行、其
 人、布商と共、村店を出、密に語、云々、吾、甚急、更、君が
 布、捆中の物を需む、暫借、たまへ。某月、某日、尊宅、造、還、奉らん。
 必相領事。幸、と声、揚、王、勿、若、否、王、必、君、の、爲、不、利、ら、ん
 と云、訖、長、緝、く、去、る。其、疾、事、飛、如、頃、刻、行、方、知、且、成、ま、る。
 布商、大、駭、急、死、舟、歸、く、乃、布、を、皆、故、の、如、く、捆、束、し、初、め
 置、し、少、も、移、動、さ、ず、甚、公、疑、ひ、之、を、船、中、啓、視、ん、も、不、便、亦

其、其、中、の、家、小、抵、也。始、と、捆、を、解、く、視、る、金、既、無、し。忙、然、と、し、
 大、異、之、け、是、た、爲、ん、方、あり。徒、其、期、日、を、待、居、る、其、日、既、斜、に、成、り、
 門、前、寂、然、と、し、一、人、も、來、る、者、無、し。因、と、意、其、約、を、所、を、全、く、我
 を、誑、る、り、と、思、ひ、然、る、期、日、より、三、日、を、を、り、と、彼、人、囊、を、擔、ひ、
 友、と、共、み、あり、積、を、償、め、者、來、れ、り、と、云、ふ。囊、中、より、金、を、出、し、前、數、の
 如、く、返、す。其、月、數、を、按、へ、と、五、分、の、息、を、加、へ、又、別、に、一、封、の、銀、を、出、し、曰、吾、友
 些、兒、の、故、有、く、帰、く、來、り、故、約、日、を、爽、あ、る、る、三、日、あり。因、と、更、一、月、の、
 利、を、加、へ、返、納、し、と、云、商、遂、巡、り、と、問、く、曰、君、を、固、く、俠、士、あり。前、日、何、の
 急、用、あり、と、吾、金、を、假、り、玉、爲、其、人、答、く、曰、吾、至、親、の、人、事、を、犯、し、
 必、在、一、故、急、謝、を、行、く、命、を、買、ん、と、欲、し、是、共、倉、卒、の、事、を、辨、せ、
 非、同、録、卷、之、八
 七三

事能くす。故め己む夏をなむ。暫く君の金を假りて。商又向て曰。布
 相少も動らむ。金を何と取り出し。王侯其人笑て曰。吾自取法あり。
 必向玉ふ夏勿とと。乃酒を索て共飲。且云。吾輩何處の物ゆても
 取らんと夏を。取るとと云事あり。但人の累を貽と恐る故め為さ
 こと。頻め數杯を傾て。暮夜に成けし。去るべしと。二人中庭に歩み出
 ず。二躍りふ屋上の躍り登りて。屋の瓦に音をく。二人共め去向知らず成
 けり。

義盜

湯若士人進士前とありて。北京都の上りる途途中ゆ。驛有て雄
 偉る人め遇て同行る。此人行も止るを必湯と偕りけり。日を登り

学

まもも狎るるひたり。彼人湯め向て。君が囊中の金幾何あるぞと問
 けり。湯隠さず。宜を以て答ふ。彼人又曰。君が行李吾僕め負
 り。君が肩を息めんと欲も。許し玉へんや。湯曰。可笑と云て其盜め
 る疑ふを少しも無し。懇所毎め彼人必先驅りて。湯が為め飲食を具
 と待居る。此の如くもるる。九数日。湯をばりて。視て笑て曰。君
 宜め長者に我固より。緑林の豪家あり。君が囊め幾多けり。君がぬめ不
 利を為んとす。然るに我のひかき。君を推して人の腹中め置く。予を
 少し疑ひ玉へ。予竊め君が囊中を驗め果して君が言玉ふ所の數
 少も違わぬ。予盜るとい共何ぞ金の枚を以て。君の如き長者と賊ふ
 忍んや。前途吾属猶君。君を送り奉ると。數日護送て曰。君行良

燕京燕の都程ちか近ちか々々矣や。道路難有みちづち有あるなり。莫な無し。吾われ之が此こゝより別わかるべし。一ひととく。遂ついに
市いちの赴ゆくに遇あひたり。湯ゆの涼さやみま至いたるなり。日ひをぬくを行ゆくるなり。羅ら者にや盗ぬすをけりす
ぐ其由そのよしを向まんとけはぬべし。盜ぬす賊ぞくの目めをせりと語ことるに勿なし。是こゝ全ぜんく
相累あひあせり。事ことをおそる。故ゆゑにこゝの法例ほりおとぬ。騎馬きまの盗賊ぞくの精夫しやう持ぢ
捕とらふにたく。首くびを斬るに。瀟しやう訊しんと言ふに。莫な無し。騎馬きまとく。精しやう夫しやう持ぢ
斬きるに。斯こゝせり。池いをたらし。湯ゆのあつまを方無し。只ただ愴あはれし。然しかんともあらず。

雲娘

密雲みつうん名な地ぢの汪恭かう將しようと廣陵りやうの名地ぢ人にん也なり。美みの王忠ちゆうと言ふ者也なり。常じやうの酒肆しの

李家りやうけの往來きやうらいしけはぬ。わらんと。相あ善ぜんなりなり。時ときに李家りやうけの一人ひとの娘也なり。
名なを雲娘うんぢやうと云ふに。父ちち母はは寵ちゆう愛あいしますに。今いま年ねん十八じふはち歳さいに成るに。王わう忠ちゆうの歸馬きま也なり。
程ほど歴れきと汪任にん満まんけし。官くわんを解きて。維い揚やう名な地ぢに歸らんとすに。仕しを代わり。王わう忠ちゆう
を呼ぶに。典てんの具を備へり。戎じゆう謀ぼうるに。王わう忠ちゆうも亦雲娘うんぢやうを載せる所の者に屈して
名なを雲娘うんぢやうと言ふに。主しゆの行李ぎやうり甚じだんなりなり。河か北ほく道どうの道を行くに。王わうを召すに。征せい途と必ひつ
靖せいさす。我われらも軍ぐん人にんの装束じゆうとく効きうくし。弓きゆう矢やを執りて。後のちに行くに。不ふ虞ゆを戒んと。許ゆるすに。王わうへんやと云いふに。戎じゆうのくめつらし。ひまひに雲娘うんぢやうを召すに。五ご石せき
の弓を授けり。乃すなはちこゝを折る事。枯こ梗げいを折るが如ごとしに。凡おほ多おほ数すう弓きゆうを引けり。
だた悉しつくに雲娘うんぢやうが意を稱へり。願ねがはし。王わう忠ちゆう向むかひて。曰いはくに。我家わがやの弓を執すに。と
乃すなはちこゝ去さりて。遂ついに戎じゆうの腰に着けり。矢やを抽きて。駿馬せんばを乘りて。從したがひて行ゆくるに。時ときに

己卯の歳の夏明の崇禎十二年の明の亡明の亡と云々時節群盜路を塞と
 行客を劫殺しけり。江泰將行々々ある荒原に至り。遙め向を刃まはし
 余騎の賊共塵を擁く突くと至る。雲娘ををんく。馬を縦く真先前
 賊矢を獲くと雲が袖を拂ふ雲袖を揮ふ矢乃地は落る。又一
 矢到る飛雲を以て承く。即鼓を發ちけり。賊ををんく。駭馬を反
 しく奔らんと云所を項を射着らんとく。忽地上は仆る。雲又腹
 の中の矢を取ると疾く。発しけり。又二騎斃る。是ををんく。餘賊後をんく
 しく遁散る。是は因て泰將事故なく家へ抵着る。行李全うしく
 寸著の失無き。雲娘が功あり。雲娘容貌殊しく艶しく。泰將が子
 心を動く。狎むると欲しけり。雲娘曰。妾を下走の陋質あるふ

不意の公子の憐を蒙る。寔の望外はせり。然共王忠斯め在ると
 公子の意め任さるめ忍び。今王忠を外へ遣り。其後礼を以て妾を迎へ
 玉め若る。我乃従んと云る。故公子望外あり。喜め堪へむ。乃王
 忠め厚く給しけり。雲娘即指示し。去しめり。公子吉席を治して。雲
 娘が粧を催させ。雲娘忽て戎服易へ。佩く所の刀を制み。悠々と立
 出。堂上へ立と公子と責と曰。爾が家も忝も累世より高牙を建る。門
 地。然爾め奇計を出し。困思め報はん。我ををんく。偶少菴甘又偶
 蒲馬とく。膽を悚む。妾一婦人を以て。長途を衛く。安吉と迄。も吾
 公子め報る所の者至り。然爾め何ぞ。必め不義を行く。我が貞素は玷
 んと云と云と。處は刀を以て。公子はあはけらる。跡あり。とく大のふ



雲娘汪泰將の
 行李を守りて
 擅小賊等と
 大に戦ふ



呼ぶと曰く我を遣ふ者あり。我即其頭を断ん。河北の益の如く
んと云けし。公子を始諸人皆驚き悚ま。魄を喪ひぬ。雲娘も悠々と
門外に立坐す。門外に已に碧衫奴来り。馬を控へて待居り。遂に其
馬を騎り馳去り。永く復返らざり。遂に其

飛瓊

飛瓊を廣陵地の何氏の女あり。母を隨て蜀中の中ゆり成長し。蜀王
の府へ入り事へさる。梨園を習ひ顔色人々絶え。又衆をわけし。蜀
王甚に愛し。晝夜側を離ざり。困草す。明朝七七日。清の初大帥は
得ては仍樂籍よけ居り。一都閩ある人適相狎り。千金を以て飛
瓊を買去る。大帥悪く思ひ。其短を持て復千金を索む。諸當事も

又責求けし。更大金を費せ。遂に。都閩遂に庫の上り。帑を
欲ふ。其罪を以て獄に下りけし。償ふ籌も無りけし。飛瓊都閩に
向て曰く君妾が故を以て。此難ふ至り。今若小節を惜み。此を守り居ら
ば。終に主を獄底に陥んと。遂に辭し去り。又漢口地と云所に至り。密に一室
を求め。處を處が中秋月朗り。遊人雜沓する。時至り。飛瓊救ひ
欄干小凭り。月に向ひて一聲喉轉けし。其声九陌に響傳り。觀者雲の如
く。稱譽せざる者あり。明晨より巨商貴客盡く。車馬門前けし。飛
声價大に高く成り。僅に三月の間は。所の纏頭を以て。都閩に欵額を清
けし。都閩免れ。獄を出る。都閩大に喜び。速に人を遣り。飛瓊を迎へけ
し。飛瓊乃至。都閩に向て云ふ。妾も本烟花の賤質。主私昵み。弱

非因録卷之八

く。動もまじく。國の課を虧く。縲紲又陷るるを致し玉ふ。故又垢を蒙恥を忍び復声と色と衣以て。人ぬ媚事へ其纏頭を以て。主の幽繫を免せしめ奉り。とひふま。既ふ一ひ際し。身復穢濁又陷ぬ。尚何の面目有く。偷生く主君の辱を重んやと云ひく。遂ふ自經し。死けりとも。

義虎傳

嘉靖年中。山西五藏山。孝義縣の樵夫早朝。高唐山ある叢菅中。穴の形金を覆たるが如く。四面切立。なる穴内三面を。さるる岩角ひと。ももひぢりぬ。前の二面を。稍一平。高き一丈をりあり。且藪薄の。落し一筋あり。是虎の出入を。樵夫踴り出んとく。斃

落る。又幾度と云敷を知り。遂に上るる。傍徨と立遠り。泣く死を待より外あり。日落風生。虎嘯と壁を踰り。穴の入り。大虎一ツ口の生を。麋を銜へ。其肉を分く。小虎共。飼ふ。樵者。蹲伏し。肉を推ま。與へ食し。小虎を抱く。臥る。樵私に。度。今宵。虎食。飽る。明朝。我を食ら。居る。味爽。方。成。虎躍。停午。頃。又鹿一を銜。來。小虎。飼。其。餒。例。樵。投。與。此。時。樵。餒。事。甚。かり。け。其。肉。取。啖。渴。時。自。其。溺。飲。此。の。如。く。する。彌。月。餘。浸。虎。と。押。ぬ。小。虎。漸。々。壯。成。或。日。大。虎。負。外。へ。出。故。樵。意。あ。り。て。天。を。仰。大。王。我。を。救。ひ。と。呼。り。け。須。臾。あ。り。て

虎復穴へ入る。雙足を拳首を俛く。樵が側より虎の騎を
 けし騰上り樵を穴の外に置き。虎と子を携ゆ。陰崖下のく。木草
 生えたり。鳥の声。ふきこえど。風獵々として。黒林より吹出ると。樵は血
 急しく。大王と呼ぶ虎乃。卻頭を樵と告ぐ。曰。大王我をなまひぬ。り
 今茲ぬく見せし玉を。他の患免せざるん。我懼る。大王我を活玉を。
 我を中衢より導玉。我死せしを大恩を報事を忘る。と哀乞けし。
 虎頷く。遂に前より中衢に至る。反り立ち。樵を視る。樵復臨み。曰。小人を
 西関の窮民なり。今別を奉りて。家へ歸るを必。豚一ツをのち。西関より
 三里外なる。郵亭の下より待奉る。某日某時。大王出来。ま。きり
 め。五口言を忘れ玉の勿と云けし。虎點頭す。樵者泣けし。虎も

又涼を隨。別を。樵夫家へ歸る。追ひ。家人驚愕。一。訊る。不
 樵夫其故を語。喜あり。期日。至り。豚を具。宰
 割。程。虎朝。先。至。樵を。故。竟。西関の中。入。居民共
 虎を。驚。急。獵者。呼。先関の柵を。閉。各。斧。斨。斧の類を
 持。競。集。生。擒。巨。宰。又。献。せ。んと。約。を。助。る。處。樵夫奔来。衣
 入。向。曰。虎我。大。恩。わ。願。公。等。傷。ひ。ぬ。勿。且。と。言。を。衆
 入。聽。の。色。竟。又。虎。を。生。擒。巨。宰。献。せ。る。樵夫。鼓。を。打。大。呼。り
 け。召。入。問。又。多。く。の。代。具。を。告。官。其。誤。を。ん。疑。ひ。く。
 大。怒。詰。訊。け。樵夫。請。驗。王。若。稟。を。所。証。を。願。を。占。花
 受。ん。と。請。是。因。官。親。虎。の。所。至。樵夫。前。虎。を。抱。く。痛。く

哭く曰吾を救ひし者と大王との虎を虎黠頭樵又曰大王今日の約を赴
 くを以ての故の関め入し虎復黠頭樵又曰我今大王の為に請命を乞ふ
 命を請ひんを願ふ命を乞ふ大王の命を乞ふ大王の命を乞ふ大王の命を乞ふ
 泪を地の隙を事雨の如く降りしを觀る者數千人歎息せざる者無し官
 大の驚駭し趨ぬ虎の縛を釋き驅く郵亭の下に至る豚肉を投ずけ
 且虎尾を矯く大口の嚼盡し樵夫を願ふと云其言未訖らざる虎
 虎亭と名づけしと云。

大鳥

天津地の某寺の鳩尾の鶴鳥巢を作せしけるがのそを承塵上の大蛇
 のゆと盆の如くちかき藏居る鶴の雛團翼の時小至る毎も被蛇



此の如くする夏三幸あり皆人今幸と必至らんと必ひるふ又來と
 巢を作るの故の如し離長成する時ふると即還ぬ飛去りぬ三日をり
 の如く鶴始く還りて巢に入る啞々と鳴る子小哺食初の如し大蛇例
 の如く蛇頭をくさす巢の近着んとする蛇をくさす驚死哀鳴
 飛く忽青冥の直上を飛越え達々と羽声傳え一瞬する間も天
 地晦く成が如く見えざる環駭く共視る乃その翼天日を蔽ふと
 其の大鳥直下下り爪を以て蛇を撃け且蛇の首を立折り地を墮ら
 殿の角を數尺計摧たふ大鳥を翼を振ひて飛去るニツの鶴も
 其後雨後の鳴々あはれ死に送る如くして見えざる巢傾る雨の雛共ぬ

地ちの地隨ずるが二ツを死一ツハ生と在々衆寺僧生る取る鐘樓の上に
 置け且六少頃一く鶴返り至り仍就くとぐみ養ふさく翼成く後に
 去ぬるり。

通俗排悶録卷之八 畢

